

臨床教育学講座の一年を振り返って

『臨床教育人間学』第10号は、2009年1月-12月における、臨床教育学講座に関わる人々の活動の軌跡を記したものである。この間、数々の新しいできごとがあった。まず何よりも最初に、講座への客員教員として、鎌田東二教授をお迎えしたことが大きなできごとであった。鎌田教授のご専門は最も広い意味における宗教研究である。そのご業績は単著だけでも三十冊を超える。ご研究領域は、「神道研究」・「宗教哲学的研究」・「子ども研究」と整理される。「神道研究」は、神道思想の文献研究ではなくて、自ら聖地に赴き思想が発生した「場」に身を置き、同じ「行」を体験することによって言葉が生成するその現場に立ち会い、そこで体験された自らの身体感覚をもって宗教者の残した言葉を内側から解きほぐす、「フィールドワーク」を基盤とした「臨床的」方法である。「子ども研究」は、そうした「神道研究」「宗教哲学研究」の知見と深く結び付いている。そこでは、社会の秩序に取り込まれてしまう以前の「子どものころやからだ」がいかに超越的な領域と触れ合っているかが、子どもの変容の問題として論じられている。鎌田教授のご研究は、人間の変容を、宗教性・超越性・生命性の視点から捉えるものであり、「発達」にも「社会適応」にも収まりきらない、ひとつの生命が自己を開花させてゆく出来事をフィールドワークにおける自らの身体感覚を通して内側から解きほぐしてゆくものである。これは、まさに臨床教育学の課題と深く重なり、講座全体に大きな刺激をもたらして下さるものと、講座一同、鎌田教授のご着任を心より嬉しくお迎えしている。

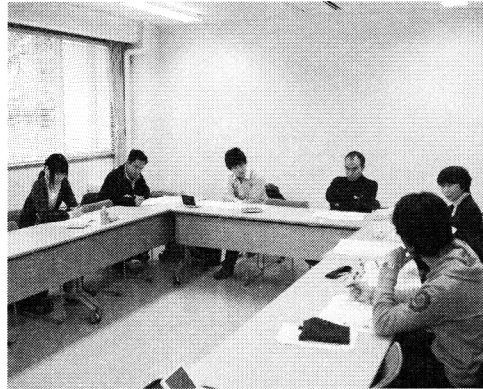
次に、講座教員、大学院生の主たる出版業績である。矢野智司教授は、「沸騰する教育人間学への誘い——絶対的な問いの探究は教育人間学に何をもたらすのか」(『教育哲学研究』100号記念特別号、pp. 329-343)、西平直教授は、『世阿弥の稽古哲学』(東京大学出版会)、鎌田東二教授は、『神と仏の出逢う国』(角川選書)、齋藤直子准教授は、『〈内なる光〉と教育：プラグマティズムの再構築』(法政大学出版局)を出版した。大学院生の業績については、審査受理論文を見るだけでも、池田華子「シモーヌ・ヴェイユの『創造的注意』——『関係』における創造性の回復に向けて——」(『教育哲学研究』第99号、pp. 83-101)、井藤元「シュタイナーのゲーテ『メーメルヒュン』論——ゲーテ、シラー、シュタイナーの思想的邂逅——」(『ホリスティック教育研究』第12号、pp. 1-13)及び『崇高論』によるシラー美的教育論再考——シラー美的教育論再構築への布石——」(『京都大学大学院教育学研究科

紀要』第 55 号、pp. 173-187)、辻敦子「文学作品と経験の語り方：W. ベンヤミンにおける経験へのアプローチを手がかりに」（『京都大学大学院教育学研究科紀要』第 55 号、pp. 159-172）など、めざましい活躍ぶりが伺える。

本号に掲載された諸論文は、以上のような講座の一年間の歩みと重なりつつ、臨床教育学講座に関わる人たちが一年間に達成した思考と対話の歩みとして寄せられたものである。



鎌田教授の授業におけるフィールドワーク



西平教授の授業

特集：京都大学大学院教育学研究科・ロンドン大学教育研究所 第二回国際会議

昨年度に続き、本年度も講座の大学院生が中心となって参加したロンドン大学教育研究所（IoE）との国際交流の成果として、第二回国際会議「自己・言語・他者（Ⅱ）：心理学と哲学の対話」（2009 年 2 月 28 日～3 月 1 日、京大会館）において発表された諸論文の一部を掲載している。本企画では、京都という地で、教育哲学、教育人間学、比較教育学などの教育学研究、および、教育認知心理学や心の理論研究に携わる日英の教員、研究者、学生が学際的・国際的な対話交流に従事した。基調講演として、IoE のポール・スタンディッシュ教授に「京都学派の思想についての東西対話」と題するご講演をいただいた。また西平教授からは、世阿弥の思想についてご発表をいただいた。京都学派の思想についての東西対話の企画は、2008 年 8 月に京都大学で開催された International Network of Philosophers of Education（国際教育哲学会）の第 11 回大会において、開催校企画として執り行われた京都学派の教育思想についての国際的なパネルディスカッションを引き継ぐものである。その成果は、世界各国の研究者と臨床教育学講座の教員を含む京大の研究者の対話の著として、

現在、外国の出版社から刊行される英語による編著として出版準備が進められている。「人間の愛容」という視座から京都学派の思想と教育の関わりを論じることになるこの本は、臨床教育学の伝統とその継承、発展を世界に向けて発信するものとなるであろう。

さらに、大学教育という意味でもこれらの国際会議の成果を引き継ぐべく、2009 年前期の「臨床教育人間学演習 I」では、西田幾多郎の『善の研究』の英語版 *An Inquiry into the Good* を英語でディスカッションするという初の試みもなされた。そして、今度は、この大学院ゼミの成果を引き継ぐ形で、2009 年 9 月 20 日・21 日に IoE で開催された第三回国際会議において、西田のテキストをイギリス側参加者と共有し、これについてグループディスカッションを行うという機会が設けられた。京大側の学生にとっては、イギリスの大学院でのセミナー形式を経験するという意味をもち、またイギリス側の学生にとっては、日本を代表する京都学派の思想の系譜から学ぶという、相互的な異文化間交流の意味をもつものであった。

本特集に掲載されている学生を中心とした発表論文は、以上のような対話的な学問交流の成果の一端を示すものである。第二回国際会議では、イギリス側学生の主発表に対して日本側の学生が応答発表をするという形式を取った。逆に、第三回国際会議では、臨床教育学講座の学生を含む京大側学生の主発表に、IoE 側の研究員、学生が応答することになった。応答者をつける発表形式は、イギリス教育哲学会等、欧米の教育哲学の国際学会の形式を取り入れたものである。また第二回国際会議では、スタンディッシュ教授のご提案とご協力をいただき、日本側学生が応答論文を作成する過程で、応答する相手のイギリス側大学院生に論文の英文校閲指導を受けるというチュートリアル形式を取り入れた。研究内容に精通するネイティブスピーカーの校閲は、英語の直しのみにとどまらず、書かれた内容そのものを日本側学生が再度反芻し、準備に臨むという教育効果をもたらすものであった。さらに、日本側の学生の間でも事前準備や会議での発表協力を通じて、大学院生が学部生に対してメンター的な役割を果たすという関係が培われた。学部生は、講座の大学院生の国際的な場面での活躍に触発された様子である。こうして言語と文化の境界を超える経験は、語学としての狭義の翻訳を超えて、自己と他者の経験を翻しあう、広義の翻訳経験であったと言えよう。本特集号に掲載された諸論文は、この会議の発表の成果を掲載したものである。一部の京大の学生の応答については、会議終了後にさらにイギリス側の主発表者からコメントをいただき、それを基に議論を反芻して追加改訂がなされている。

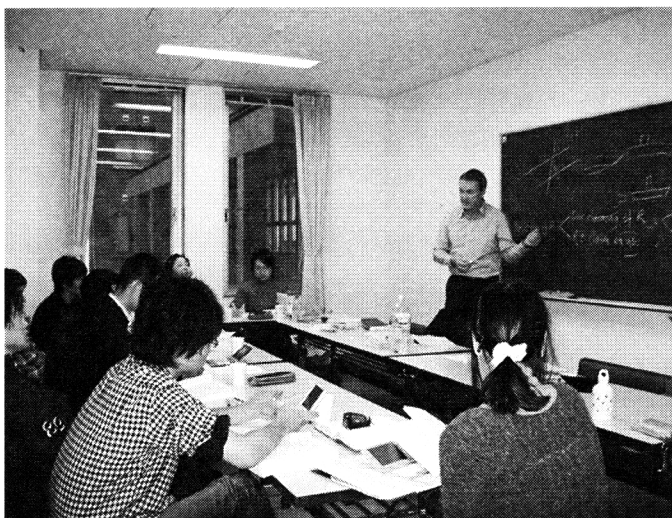
こうした英語論文の発表成果は、ロンドン大学との国際交流企画の一つとして同時並行的に進められてきた「国際フロンティア」の英語の授業とも不可分の関わりをもつ。2008 年

に引き続き、2009年度も、12月5日、6日、12日の3日間、スタンディッシュ教授に授業をご開講いただき、臨床教育学講座の大学院生や学部生も参加した。授業は、言語との関わりを通じた自己変容、他者との受容的關係、そこから出発して公共性へと開かれる道筋を開く「日常言語の哲学と教育」を主題とするもので、臨床教育学の課題とも密接に関わる内容であった。そこでは、英語という外国語を通じて、哲学的思考に従事し、自らの問いや意見を長時間に渡って表現する経験そのものが、臨床教育学・教育人間学の営みであったと言える。参加学生たちは、自らの思想を英語で表明しようとしてもできないもどかしさ、外国語で思想を置き換える過程そのもので自分の思想に出会い直すこと、そして完全な置き換えの不可能性や言語の限界につき当たることによって言葉の重みを再認識することなどを経験した。それは、内側から自己と言語と他者に出会い直す経験でもあったように思う。

京大とIoEの国際交流は三年目を迎え、教員、研究員、学生の交流も発展的に培われている。この中で臨床教育学講座の学生たちは、研究を通じてIoE側の参加者と友情を育み、外国の研究者と議論に臨むための訓練を積んできた。こうした経験は、今後、海外の国際学会で発表や応答をする際にも生かされるであろう。この三年間の交流の歩みの中で、IoE側の窓口としてスタンディッシュ教授には、国際交流の促進と、京大側の大学院生の教育にご尽力いただいていた。同教授は、会議の企画運営において、京大側教員・大学院生のためにIoE側の最適なパートナーや発表者を選んで下さり、会議や授業を通じて臨床教育学講座の学生一人一人に対して、研究や英語の面で献身的な指導をして下さった。同教授の存在によって国際交流の場が形式的なものではなく、教え学び合う対話の場となったともいえる。広義の翻訳経験を生起させる臨床的な場の創造には、媒体者たる翻訳者の存在が不可欠である。IoEとの国際交流企画を通じた数々の異文化・異分野交流の成果は、そうした場を創出する媒体者としてのスタンディッシュ教授のお力なくしてはありえなかった。そのようなご指導の一つの成果として、講座の大学院生が国際的な学術誌に英語論文を出版するという業績も生まれつつある。臨床教育学講座の学生が今後国際的な場面で活躍してゆく可能性を開き続けて下さっていることに、この場を借りてスタンディッシュ教授に、心より感謝申し上げたい。本紀要が、講座の大学院生との交流に携わってきたIoEの教員、研究員、大学院生のもとにも届けられ、一層の交流発展につながるものとなれば幸いである。

2010年1月17日

齋藤直子



スタン迪士教授による「国際フロンティア」授業



ロンドン大学教育研究所の大学院生との交流